



# 庭は輪廻の中にあり

THE GARDEN IS IN TRANSMIGRATION OF THE SOUL  
DISCUSSION:HIROMASA AMASAKI X YASUHIKO MITANI

対談:

作庭家・尼崎博正

ランドスケープアーキテクト・三谷康彦

## “大自然の輪廻”を噛み締める

三谷 私はこのプロジェクトに縁のようなものを感じています。というのは、大学を出て数年間、京都の公共造園の設計事務所に勤めていたのですが、デザインに行き詰まり、当時京都の老舗の庭師の元で職人をしてもらった尼崎先生のところへ「実際の現場の仕事がしたい」と相談に行ったことがあるのです。その時は「もう設計をやっているなら、やめときなさい」と言われました。でも現場の仕事が分からなければ設計などできないと強く考えていたので、京都の西の方の庭師に弟子入りし1年程修行した後、尼崎先生に再びお会いして自分の近況報告などをしました。結局、京都で庭師を5年程やって腕に自信が付いた後渡米、アメリカの東海岸や西海岸のランドスケープの設計事務所に通算16年間いましたが、そこでは伝統的なこととはまったく違う観点からガーデンを考えていました。帰国後、縁あって日建設計に入り、京都迎賓館の仕事に携わるようになったのですが、このプロジェクトで、伝統的スキル活用委員会の委員としての尼崎先生と再び一緒に仕事をすることができたのです。自分の中では紆余曲折を経て、物理的には世界を、またプロとして経験的にも一回りしたかなという印象です。今回のプロジェクトで先生には、さまざまな意味での評価をしていただく大変な役割をお願いしましたね。

尼崎 私も、自分の手で確かめる世界がいちばん大切だと思い、京都大学大学院を飛び出して庭師になったのです。“感じ取り”ながら、“壮大な自然の輪廻”をじわっと噛み締めることが造園には大切です。それを自分の感覚で味わい、心と融け合う中から庭が生まれてくると思うのです。

三谷 アメリカのランドスケープは、私が7年間勤めたPeter Walker 事務所は特にそうなのですが、モダンアートの発想が基で、どちらかというところランドスケープアーキテクトの個人的な好みや思想がかなり強く表に出るものです。

かたや、日本の伝統的な庭の考え方は自然から発想を貰うところがあると思います。この計画では、自分自身の中でその両方を踏まえなければいけないだろうと考えていました。

デザイン展開の最初の段階では、たとえばですが既成の数寄屋風の庭などとはまったく違うものと考えていました。従来の京都の庭には見られないモダン・ランドスケープデザインというか、庭全体を貫く強い「軸」のようなものがあってもよいと企んでいたのです(笑)。でもある時点からデザインとしては安全パイの「引用の庭」に傾いて、京都の多くの名園をセიმスケールで引用して徹底的にスタディした時期もありました。最終的には、「引用の庭」ではない新しい庭の形にすべきだとの尼崎先生の助言もあって、意匠全体を見直し、現在の庭の形になりました。でも各過程で考えた形が痕跡だけに留まらず、プロポーショナルにも見直しの中で上手く繋がっています。たとえば、大広間前のドウダンツツジの刈り込みのポリウム。元は、私は四角く刈り込んだアラカシの直線の生け垣をかませて、船着石の力をもう少し陸地まで引きずり上げていきかけたのですが、柔らかく雰囲気を変える手法に移行しました。

尼崎 建築のラインは端正なのですが、それと同じように水平なラインの生け垣にしたら、空間が硬くなりすぎるし、はっきりと分節しすぎてだめだと思ったのです。落葉樹にしたのは、夏は緑が柔らかく、冬は軽く透けて見えるからです。造形だけではなく、季節による植物の変化を合わせて、向こうの空間がイメージできる境界にしています。全体としてもそういう風に納めていきました。

日本庭園というと、現代では囲われた空間をイメージしがちですが、本来は、大らかで、外部に繋がっていたのです。それは、日本の風土、地形を考えてもごく当たり前なんです。どこにでも山があり、自然と共に生きてきた。そういう認識こそが日本庭園の伝統だと思います。



尼崎博正(あまさき・ひろまさ) 写真左

1946年兵庫県生まれ / 1968年京都大学農学部卒業 / 造園の現場を経て、1989年京都芸術短期大学教授 / 1992年農学博士号取得(京都大学) / 1994~2001年京都芸術短期大学学長 / 1994年~日本庭園研究センター所長 / 1998年~京都造形芸術大学副学長 / 1992年日本造園学会賞(設計作品部門)受賞

三谷康彦(みたに・やすひこ) 写真右

1947年大阪府生まれ / 1971~81年京都にて造園の修行 / 1981~90年J.L.A. Inc. / 1990~97年Peter Walker事務所 / 1997年~日建設計ランドスケープ設計室 / 現在、同設計長

三谷 少し言い過ぎかもしれませんが、「建築家は人に従い、造園家は自然に従う……」と言うやつですね。

尼崎 『作庭記』にあるように、自然にも素材にも、「乞はんに従う」のですね。彼らが「こうしようよ」と語りかけてくるのですよ。デザインしようと意気込みすぎると、得てして押しつけがましいひとり芝居になってしまう。もっと根源的なところで人の気持ちは通じ合うのだと思います。

三谷 それが接遇施設としての京都迎賓館の庭ではもの凄く大切な部分で、そういう庭であるべきだと途中から気が付きました(笑)。

## 根源的な人の営みを捉える

尼崎 京都迎賓館の敷地だけを取り出して見ると、建築と庭の融合空間と言えますが、周りには京都御苑の緑があって、遠くには京都盆地を取り巻く山々があって……。実は、敷地の外から京都の自然の奥深さがしみ込んでできていると考えているのです。

同じような意味で、基礎工事に出てきた石はこの場所の主ですから、庭に使うことになりましたね。この敷地から掘り出された石というのは、平安京ができるずっと昔、賀茂川が氾濫を繰り返していた時代のもので、この石を媒体として空間イメージの深まりと時間の広がりが出るのですね。





三谷 敷地から出た砂利を使おうと決めた時には、実際にどの程度の量が出るのかも分かりませんでしたので、すごく不安でした。

再利用といえば、この庭は、現代の新しい「見立て」の庭と見ることもできると思います。

塩田で海水を入れる堰門に使われていた石やその笠石、元は橋の欄干に使われていた石や基礎だった石などを使っていますが、どれも「人と自然」、「人と水」との関わりにゆかりのあるものです。これらは主に、四国の和泉さんの石置場にあった、前々から目を付けていた素直な石の方材です。実際に使われていたものに別の意匠的な意味を持たせて使っているのですが、これは昔の茶人や京都の庭師がやられていた「見立て」の現代版のように思います。

尼崎 歴史・文化という、人の営みの最終的な形を大切にすることも、自然との関わり方の過程をいかに根源的な様相として捉えるかが、重要です。大滝の庭の石を、石矢で割って、その矢跡を見せているのも、人が自然と関わる中でのひとつの営みの痕跡の表現です。いわば、究極の「見立て」ですね。

三谷 矢穴を空けて割った石は、現場工事途中に、建築チームから雨だれが石に落ちると水が跳ねてガラスを汚すからどうかしてほしいと言われたものを、土庇から雨が落ちてくるちょうどその位

置で石を割って、その隙間に雨だれが落ちるようにしたらどうかと考えて、和泉さんのところの石の大割を得意とする職人さんに来てもらい、割ってもらったものです。割れるまで上手くいかどうか心配で、ずっと傍で見えていました(笑)。

尼崎 人の営みのプロセスと自然の営みとの絡みが上手く表されていると思います。

そういうのが、たまらんですよ(笑)。

三谷 たまらんですね~(笑)。大滝の石組では瀬戸内産の花崗岩の巨石をたくさん使っています。「なぜ京都以外から石をもってくるのか?」という話も途中に出たのですが、実は前々から私がチャンスがあれば使いたいと思って惚れ込んでいた材料があったのです。

尼崎 大滝の石も、石切り場で人と石とが格闘している、そういう生々しい情景が表現できたら、この石は生きてくるだろうという話をしました。自然の中での葛藤が感動を呼ぶ。そういう微妙なところこそ、説明しなくとも人に伝わると思うのです。造園の面白いところですね。

三谷 以前から石を探しに庵治の採石場はもちろんのこと白石島や北木島、小豆島の丁場にもよく行っていましたが、石切り場は行くたびにダイナミックでいてスタティック、不思議に美しくて心がとても安らぐ、地球の懐に抱かれているような感じ。現代の禅の庭のようだと感じていました。

## 現場でのやりとり

尼崎 棟梁をはじめ、庭師さんたちは大変だったと思います。設計者である三谷さんのイメージがあって庭師さんはそれを形にしようとしながらも、自分たちが今までに蓄積してきたものとの間で葛藤する訳ですよ。ですが、最終的な納めの段階での庭師さんには凄いものを感じました。自分の思いと設計者の思いが違って大論議した時にも、こうと決まれば見事に納めるのが一流の庭師さんの凄味ですね。「これはこうだ」とそれしかやらないのではなく、「こだわりながらも、とらわれない」。そういう自信と柔軟性が一流の技能者には備わっている気がしました。

その意味でも、棟梁である佐野藤右衛門さんの存在は大きかった。最高の技術を若い人たちに伝えるのだという使命感というか、庭師の意地を強烈に感じました。たとえば、石を組む時に「箱ジャッキ」という、今では誰も使わない道具を駆使し、昔ながらの微妙できちんとした仕事を当然のことのようにこなす。あるいは、石工の西村金造さん・大造さん親子が船着石の噛み合わせの時にやって見せた仕事ですが、石の下面にいくつかのホゾ穴を穿って、石を支える数本の柱の上部につくり出したホゾとピタッと合わせるという技術は、実に見事でほれほれました。

三谷 あられこぼしの畳石、三和土に散らした



上3点(左): 榎藤造園所蔵の箱ジャッキ。幅210mm、厚み100mm、高さ750mm。上部のアームまでの高さ830mm、上部アームは1,300mmまで伸ばすことができる。側面溝部分のジャッキも溝をスライドして上下に重量物を上げ下げ可能。重さは35kgだが、持ち勝手が悪いのでそれ以上に重く感じる職人の言。 \*\*  
同(中): 石橋の施工状況。左下に見える橋の中柱の台石も含めて、すべての石材は設計者と西村大造氏が瀬戸内海白石島にて選定の上、詳細加工図面まで合同で作成。石加工は西村石灯呂店。据付は西村石灯呂店と庭園JVの協働。写真右の黄色いヘルメット姿が西村大造氏。中央、白いヘルメットに緑の庇は佐野藤右衛門氏。 \*\*  
同(右): 鋼管削出し柱の足元。塗装等、将来のメンテナンスのために柱足元は躯体プレートまでアクセスできるようにしておく必要があった。この部分の角穴に花崗岩の四角い飛び石などを絡ませて、叩き漆喰の犬走りに模様を取りながら納めている。角穴には、現場発生の再利用砂利の中から赤い石だけを選択して撒き込んでいる。

二石、砂利から赤い石だけを選んで鉄骨柱の根元に撒き込んで……。これらすべてが現場から出土した石です。いろいろなところで庭師さんの協力を得ながら、ここでしかできないディテールが完成しています。

**尼崎** 現場は現場で、必ずしも設計図通りにやるだけではなく、微妙なやりとりがあるわけです。現場からの発想を上手く生かしてこそ、庭は命を得るのだと思います。

### 庭が育つ時間の中で

**尼崎** 庭は、つくる段階というのはごく一部で、そこから長い時間をかけて育てていくものです。ですから、今後この庭をどう守り(もり)していくのかという思いを共有し、伝統的技術を織り込みつつ育てるプロセスが必要になってくるでしょうね。それが、100年、200年でのスケールで見た時にいちばん重要なことだと思います。

**三谷** 工事期間は長いようでいて、これから庭が育っていく何百年という時間の中ではごく短い期間です。その期間にすべてを完成状態にするなんてあり得ませんし、まして完成状態といっても静止状態ではないですからね。

たとえば、竣工直後は、コンクリートの灰汁の影響で池の水は強アルカリ性になるので、魚を入れられないのですが、今ではコイがたくさん入って

いますし、湿性植物も植えられるようになってきました。動植物が多様化し、維持管理を自然がやってくれるようなものが庭のよさだと思います。尼崎先生が研究されている、“植治”こと、七代目・小川治兵衛(1860~1933)の庭は東山の南禅寺辺りにたくさん残っていますが、植物相もさることながら、琵琶湖疏水の水を引き込んでいることもあって動物相、特に魚類の多様性は素晴らしい。その多様性が中核になって庭を美しく育てていることに違いないと思います。これは、現代において示唆に富んだ庭の維持管理の仕方だと思います。この京都迎賓館の庭も、できれば植物も動物も昆虫も入った多様で味わい深い庭となってほしいと願っています。

**尼崎** そう、水ひとつ取ってみても、その変容が生物の多様性を保証する場になっていくのです。自然の大きな輪廻の中で、庭は自分で自分たちの世界をつくっていく。その壮大かつ微妙なプロセスにわれわれがどんなかたちで参加するか、という問題になるのです。

この庭のアカマツは、今しばらくは手を入れず、そのまましておくのがよいでしょう。では、何もなくてよいかというと、そうではない。庭師さんは、枯枝を落としに登った時、幹を磨きながら降りてくる。幹をスツと磨く。そうすると、もも、アカマツの幹が映えるのですね！

何でもないことですが、これが手入れの妙味、自然の中でも最も美しいアカマツの姿が出現するのです。それを見ると、東山のアカマツに夕日が当たる——その幻想的な情景が心に浮かび上がってくるのですね。

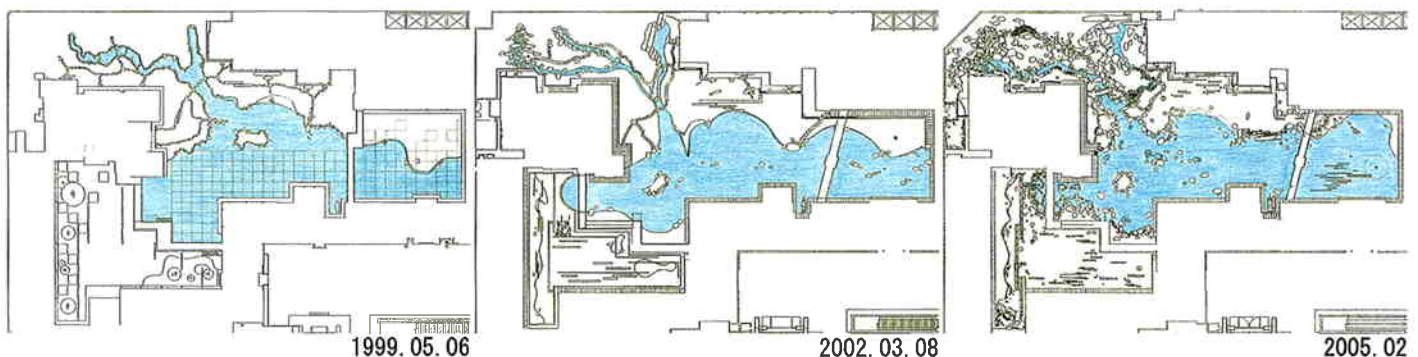
つまり「手助け」をするのです。手入れというのはもの凄く面白いものです。

**三谷** ささまざまな現象も含めて、ダイナミックに変化、流転していくもののトータルを庭と考えるべきであろうと思います。どんな世界でもそうでしょうけど、特に庭の世界は一度はまるとなかなか抜け出せないですね(笑)。

2005年7月5日 京都迎賓館にて。文責：本誌編集部。



完成後、よく庭園を訪れるようになったアオサギ。



### 庭園計画の変遷図

1999年5月6日案：いくつもつかった基本素案のひとつ、グリッドパターンのモジュールを敷地全体に当てはめることを考えた案。

前庭の車回しエントリー広場に関して、グリッドパターンを考えていた。「流れ」はふたつ。南廊橋も当初は履行しており、南の浅い池まで陸地が大きく入っていた。池をできるだけ大きく取っており、嶋の位置も中央に近かった。北の回廊も既存大クスノキとの位置関係が適切でなく、この時点では橋ではなかった。大広間前では池の州浜のアイデアが見える。池の和舟はこの頃からのアイデアであった。

2002年3月8日案：実施設計に近い案。グリッドパターンは消える。「流れ」は3本になった。セイルスケールで、柱籬宮、修学院籬宮、對龍山荘、野村碧雲荘等の庭の空間性をスタディした後のレイアウト。南の浅い池の陸地が7:3の割合に小さくなった。南廊橋に動きが出て庭

との馴染みがよくなった。また、嶋の位置が大きく変わった。大広間の前にはL型の生垣が空間を仕切っていて、庭も狭い。ここではいったん州浜案は消え、岬が池に飛び出していた。カキツバタ池を渡っていく北の廊橋のアイデアが見て取れる。既存大クスノキとの位置関係をスタディした。

2005年2月案：完成形。「流れ」を2本にし、滝や「流れ」はそれぞれの場所性によって個性をはっきりさせた。また「流れ」を意図的に建物近くに寄せ、ところによっては土庇の下を流れるようにした。南の浅池の面積をできるだけ大きく取り、人と自然の関わりを基本としつつより抽象的な空間構成に変えた。舟着き石、州浜、半島、入船の入り江とシークエンスを繋げながらつくり込んだ。大広間の庭・広間の庭は広く取り、カキツバタの庭を自然風景式につくった。「流れ」の渡りを1カ所から2カ所に増やし、土橋と石橋をかけた。L型の生垣はドウダンツツジの刈り込みに変更している。